＜実践研究＞

協働・創造のためのスキルを学ぶ授業の開発

―― ワークショップの企画・運営からの学び ――

竹林地　毅*・山本　美瑛**

学校において特別支援教育コーディネーターになることが期待される大学院生や特別専攻科学生を対象として，ファシリテーションのスキルを学ぶ授業を開発した。平成23年度は希望者による自主的な学習活動として試行し，平成24年度から，大学院特別支援教育学専攻と特別支援教育特別専攻科コーディネーターコースの授業として位置づけた。授業の一環として，履修した学生が現職の教員や大学生を対象としたワークショップを企画・運営するようにし，学びをさらに深めることを意図した。

開発・実施した授業について，ワークショップの企画・運営の効果を「ファシリテーションのスキルの実践的な知識と技能の深まり」「ワークショップの実践的な知識と技能の深まり」の２点から，また，ワークショップに大学生と現職教員が参加することの効果を「年齢・経験の異なる者によるシナジー効果」から検討した。

キーワード：連携・協力，協働・創造のためのスキル，授業の開発，ワークショップ企画・運営

Ⅰ．はじめに

「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（答申）（中央教育審議会，2012）においては，「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力，チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身につけていないことなどが指摘されている。（中略）関係機関と連携するなどして的確に対応できる指導力を養うとともに，教職員全体でチームとして取り組めるよう，こうした力を十分に培う必要がある。」と指摘されている。

この指摘は，現在の学校が直面する様々な課題に対して，学校は，保護者だけでなく様々な機能を持つ関係機関やボランティア団体等と協力して，解決策を模索する力を高める必要があることを示していると考えられる。また，教員個人の資質向上においても，授業づくり等で校内の他の教員と協力して活動する力や校外の団体等と協働関係を築き，具体的な活動を展開する力を養うことが，不可欠であることを示していると考えられる。

一方，文部科学省（2004）は，特別支援教育コーディネーターは，「学校内の関係者や外部の関係機関との連絡調整」「保護者に対する相談窓口」「校内委員会の運営や推進」等の役割を発揮するよう期待されていることを示している。特別支援教育コーディネーターには，「教職員の知恵を集め，新たな知を創造するための力」や「目的・目標の達成のため連携・協力を実現する力」等の協働・創造のためのスキルの向上が求められていると考えられる。

さて，協働・創造のためのスキルの一つとして，ファシリテーションのスキルがある。ファシリテーションは，「集団による知的相互作用を促進する働き」であり，集団のメンバー一人一人がファシリテーションのスキルを高めることで，メンバーの学習のスピードを高めること，相乗効果を発揮させること，メンバーの自律性を育むこと等が期待される（堀，2004）。

ファシリテーションのスキルは，大きく４つのスキル（「場のデザインのスキル（場をつくり，つなげる）」「対人関係のスキル（受け止めて，引き出す）」「構造化のスキル（かみ合わせて，整理する）」「合意形成のスキル（まとめて，分かち合う）」）で構成されている（堀，2004）。ファシリテーションのスキルは，短期間でチームを活性化することから近年広がってきているが，まだ，学校には馴染みの薄いスキルである（鈴木，2011）。鈴木（2011）は，学校の会議にファシリテーションを導入し，会議を活性化し，教職員の協働を促進するために十分に活用可能であることを検証し，研究協

* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座
** 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期特別支援教育学専攻

力者らも一定の評価を得ている。また，佐藤（2012）はケース会議においてファシリテーションを取り入れることで，会議の時間が減ること，多様で適切な対応策が見出される等の効果があったことを示している。

以上のことから，学校の諸活動に，ファシリテーションを導入・実施することが有益であり，とりわけ，特別支援教育コーディネーターのファシリテーションのスキルが向上することは，有益だと考えられる。

また，ファシリテーションのスキルを身に付けた教員を養成することは，学校における協働・創造を促進・実現することに繋がることが期待される。

そこで，特別支援教育コーディネーターとなることが期待される大学院博士課程前期学生や特別専攻科コーディネーターコース学生を対象として，ファシリテーションのスキルを学ぶ授業科目を試行・開発（平成23年度），実施（平成24年度）し，チームで協力し活動する協働のスキルの向上，ワークショップの企画・運営の効果を検討した。

Ⅱ．授業の試行・開発・実施

１．試行・開発の概要（平成23年度）

(1) 活動の位置づけ

筆頭著者が参加希望の学生を募り，カリキュラム外の活動として試行し，実施内容・方法等を検討した。

(2) 参加者

大学院博士課程前期特別支援教育学専攻学生等６名，特別支援教育特別専攻科特別支援教育コーディネーターコース学生１名，同専攻科知的障害教育コース学生５名。概ね毎回８名程度の参加者。

(3) 活動回数等（平成23年５月～７月）

合計９回（１回は100分程度）

(4) 活動の内容

第１回：オリエンテーション，アイスブレイク
第２回：場のデザインのスキル（プロセス設計）
第３回：場のデザインのスキル（プロセス設計）
第４回：対人関係のスキル（傾聴と質問）
第５回：対人関係のスキル（非言語コミュニケーション）
第６回：対人関係のスキル（非言語コミュニケーション）
第７回：構造化のスキル（フレームワーク）
第８回：構造化のスキル（ファシリテーショングラフィック）
第９回：合意形成のスキル（コンフリクトマネジメント）

毎回の「アイスブレイク」を企画・実施する「運営委員」を設けた。テキストとして,「ファシリテーション入門」（日本経済新聞社，2004 ）を紹介した。

(5) ワークショップの企画（平成23年７月～11月）

活動参加者の中からワークショップ実行委員を募り，４名の立候補があった。第二著者は，試行の活動に引き続き，実行委員として参加した。この４名と筆頭著者がワークショップ（１日）の企画を行った。参考書として,「問題解決ファシリテーター」（堀，2003）を使用した。

(6) ワークショップ（「協働・創造のためのスキルを学ぶワークショップ」（平成23年11月20日）

教育学研究科特別支援教育学講座・附属特別支援教育実践センターが主催し，広島県教育委員会と連携しながら実施した。広島県内の特別支援学校や公立幼稚園・小学校・中学校に案内するとともに，学部学生と大学院学生（以下，大学生とする）にも参加を募り，現職教員（以下，教員とする）と共に学べる場を設定した。当日は，ワークショップ実行委員４名と筆頭著者がファシリテーターとして運営を行った。

なお，このワークショップについては,「特別支援教育担当教員の継続的な養成の在り方に関する研究－教育委員会と連携・協力した研修実施による教員養成プログラムの開発－」（竹林地・氏間・川合・林田・落合・木舩・牟田口・谷本・若松・大鹿，2012）の一部として，既報している。

２．授業実施の概要（平成24年度）

(1) 授業の位置づけ

大学院博士課程前期の選択科目「特別支援教育ファシリテーション論」，特別支援教育特別専攻科の発展科目「特別支援教育ファシリテーション演習」として位置づけた。発展科目とは，免許取得のための科目ではなく自由選択の科目であり，平成24年度から新設した科目群である。

(2) 授業履修者

「特別支援教育ファシリテーション論」（大学院学生６名）

「特別支援教育ファシリテーション演習」（特別専攻科学生５名）

(3) 授業時間数

前期は毎週開講（30時間），後期（ワークショップを夏期休業中に実施するため，大学のセメスターとは，ずれている。）は，ワークショップの実施のため集中

Table 1　平成24年度授業概要

		内　容	授業の様子
前期	前半9回	学習する組織づくりとファシリテーションについて	「問題解決ファシリテーター」を参考に場のデザインのスキル，コミュニケーションのスキル，構造化のスキル，合意形成のスキルについて演習を中心に基礎的な知識・技能の習得を図った。また適宜，連携・協力や組織づくりに関する文献などを整理し共有した。
	後半6回	ワークショップ企画・予行演習	授業前半に習得した知識・技能を活用するため，3グループに分かれ，各グループでリーダーを中心にワークショップの企画を行った。企画内容は主にワークショップで行う演習の立案，ワークショップ進行の役割分担等を行った。
後期	8月24日（金）	第1回ワークショップ	「問題解決ファシリテーター」等の文献を参考に場のデザインのスキルを中心にワークショップを実施した。授業履修者のうち2名が中心となり企画をした。参加者は14名だった。
	9月7日（金）	第2回ワークショップ	「問題解決ファシリテーター」等の文献を参考に構造化のスキルを中心にワークショップを実施した。授業履修者のうち4名が中心となり企画をした。参加者は15名だった。
	10月14日（日）	第3回ワークショップ	「問題解決ファシリテーター」等の文献を参考に合意形成のスキルを中心にワークショップを実施した。授業履修者のうち5名が中心となり企画をした。参加者は18名だった。

開講（30時間相当）とした。

(4) 授業のねらい

幼稚園，小学校，中学校，高等学校，特別支援学校において特別支援教育を推進していくため，学校外の社会的な資源（関係機関やNPO等）と連携・協力を深め，組織内のシナジー効果を促し，特別支援教育に関する諸課題を創造的に解決していくための理論と実践的スキルを習得する。

(5) 授業概要

授業概要をTable 1に示す。

前期では，ファシリテーションのスキルに関する演習を実施し，基礎的な知識・技能を習得した（1～9回）。また，ワークショップの企画・試行をした（10～15回）。後期は，3回のワークショップ（それぞれ半日の日程）を実施し，授業履修者が3グループに分かれて1回ずつ企画・運営を担当した。企画のため，グループ毎の活動（概ね3回程度）を実施した。ワークショップは，広島県内の特別支援学校や公立幼稚園・小学校・中学校に案内し，参加を募った。また，大学生にも参加を募り，現職教員と共に学べる場を設定した。

なお，テキストとして，「問題解決ファシリテーター」（堀，2003）を使用した。

Ⅲ．ワークショップの実施と受講者の学び

1．平成23年度のワークショップ（「協働・創造のためのスキルを学ぶワークショップ」）

1）実施日

平成23年11月20日（日）

Table 2　ワークショップの日程

午前	演習1	場のデザインのスキル「月に迷ったゲーム」	(70分)
	振り返り		(20分)
	休憩		(10分)
	演習2	対人関係のスキル「大切にしていること・大切にしているもの」	(70分)
	振り返り		(20分)
午後	演習3	構造化のスキル「修学旅行を広島へ誘致するには？」	(70分)
	振り返り		(20分)
	休憩		(10分)
	演習4	合意形成のスキル「全校リレーのアイデア」	(70分)
	振り返り		(20分)
	まとめ		(20分)

2）目的

チームによる問題解決や組織内のコミュニケーションの改善を図り，協働と創造を深めるファシリテーションのスキルを学ぶ。

3）内容

ワークショップの日程を示す（Table 2）。

4）ワークショップ参加者の感想

竹林地ら（2012）と重複するが，大学生と現職教員の感想を示す（Table 3）。

Table 3　ワークショップ参加者の自由記述回答

教員	・今回のような参加型研修をもっとやりたい。仕事をする上でファシリテーションの力は本当に大切で，自分にはその力がほしいと感じているため，今回のような研修を何度もやってみたい。 ・シリーズ化してファシリテーター育成プログラムになるとよい。 ・（大学生が）真剣に参加している姿にインスパイアされた。 ・教員のみより，大学生が参加することで，意見に広がりがあった。新鮮でこちらのモチベーションも上がった。 ・積極的に発言したり，新鮮な意見を述べたり楽しかった。介護体験や教育実習では，大学生個人と深く話し合うことはないので良い経験になった。 ・暖かい雰囲気で研修できたので前向きに臨むことができた。校内の会議ですっきりしないことも時にあり，何かできないかと考えていたので良い研修会だった。明日から使えそうなスキルも多くあった。 ・4つの演習を進める中で，チームメンバーの関係が近く温かくなるのが実感でき，話し合いも深まった。演習前のアイスブレイクが，この人間関係づくりにも役立っていると感じた。 ・他の意見を聞きながら，自分との違いを認識したり，自分の考え方の特徴に気づいたりして自己認識にも役立った。 ・講師（ファシリテーター）の知識レベルが高く，準備もしていることがよくわかった。皆自信をもって話しているのが印象的だった。
学生	・大学生以外の立場の人の考えを聞くことができ勉強になった。ファシリテーターの重要さを実感した。グループの考えをまとめて発表し，目標を達成させることの難しさや大切さを学んだ。 ・これまで現職教員と話す機会がなく，勉強になった。大学生だけでは出てこない視点や意見が出て勉強になった。同じビジョンでよい雰囲気で話すことの大切さを学んだ。

2．平成24年度のワークショップ

(1) ワークショップのプログラム概要（Table 4）

Table 4　ワークショップのプログラム概要

第1回ワークショップ (場のデザインのスキル)	演習1「バスは待ってくれない」	(40分)
	振り返り	(30分)
	説明「場のデザインのスキル」について	(10分)
	演習2「B町のまちづくりプロジェクトの活動をデザインしよう」	(40分)
	振り返り	(30分)
第2回ワークショップ (構造化のスキル)	説明「構造化のスキル」について	(10分)
	演習1「失敗のプロセス、成功のプロセス」	(40分)
	振り返り	(30分)
	説明「構造化のスキル」について	(10分)
	演習2「お弁当の具を考えよう」	(40分)
	振り返り	(30分)
第3回ワークショップ (合意形成のスキル)	演習1「知的障害者のグループホームを始めよう！？」	(40分)
	振り返り	(30分)
	説明「合意形成のスキル」について	(10分)
	演習2「泥遊びをさせたい・させたくない！誰か解決して！」	(40分)
	振り返り	(30分)

Table 5　第１回ワークショップ参加者の自由記述回答

教員	・自分の思ったことを言うのではなく，議論にそってタイミングをみはからって言うことを学んだ。 ・立場を考えながら発言することを学んだ。 ・時間の限られている会議を価値あるものにできるようこれからの会議に生かしていきたい。 ・学校内でも参加希望の方がいたので宣伝したい。
大学生	・プロセスを考えることが大切なことが改めて分かった。実践していきたい。 ・休憩時間にも振り返りを行うなど意見の交流が深まった。

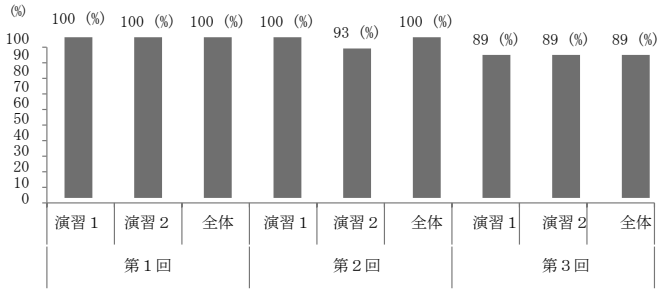

Fig. 1　ワークショップの内容が役に立った人の割合

(2) 第１回ワークショップ（場のデザインのスキル）

1）実施日

平成24年８月24日（金）

2）目的

「場のデザイン」の重要性・必要性に気づき，問題解決のため活用する。

3）内容

演習１は「バスは待ってくれない」（星野・津村，2010），演習２は「B町のまちづくりプロジェクトの活動をデザインしよう」（テキストを元にした自作課題）を行った。また演習１と演習２の間に「場のデザインのスキル」のうち，活動の目的や活動を組み立てるといったプロセスマネジメントを中心とした説明を行った。

4）ワークショップ参加者の感想

アンケートでは演習１，演習２を通しての，すべての項目で「役に立った」と全員からの回答があった（Fig. 1）。参加者の自由記述回答を示す（Table 5）。

(2) 第２回ワークショップ（構造化のスキル）

1）実施日

平成24年９月７日（金）

2）目的

議論を整理する意義を理解し，構造化のスキルを問題解決に活用する。

3）内容

演習１の前，演習１と演習２の間に「構造化のスキル」のうち，意見のまとまりを図解でまとめる「ファシリテーショングラフィック」について説明を行った。演習１は「失敗のプロセス，成功のプロセス」（高間，2005；一部改変を元にした自作課題），演習２では「お弁当の具を考えよう」（自作課題）を行った。

4）ワークショップ参加者の感想

アンケートでは演習１で15名（100%），演習２で14名（93.3%），全体を通しては15名（100%）が「役に立った」と回答があった（Fig. 1）。参加者の自由記述回答を示す（Table 6）

Table 6　第２回ワークショップ参加者の自由記述回答

教員	・ファシリテーショングラフィックが取り上げられたが，実際にその図を活用しながら話し合いをするのが初めてで，こんなにも考えやすくなるのかと驚いた。このファシリテーショングラフィックを次から有効活用していきたい。 ・特別支援を対象として会議ワークショップ研修を行うということは，とても今日的な意義がある。これからどんどん広がって欲しい。
学生	・（班によって進行に違いがあり）スケジュールを組んでそれ通りにうまく進めていたグループからすると不満を募らせる場面があった。

Table 7　第３回ワークショップ参加者の自由記述回答

教員	・自ら考え，自ら気付く本当に面白い研修だった。問題解決に向け，有効な話し合い（会議）が成されれば，より効果的なアイデアや取り組みができるのだろうと痛感した。 ・今の職場でも，win-win 型の話し合いになるよう，ぜひ活かしていきたいと思う。
学生	・合意形成は大変重要だが，難しい分野だと思った。メンバーがお互いに合意形成しようというスタンスに立つことから始めなくてはならない場面も多くあり，スキルの習得が不可欠だと思った。 ・もっと教員が参加するといいと思う。

Table 8　平成23年度ワークショップ実行委員の学び

うれしかったこと	・自分たちが考えた演習が実施できたこと ・参加者の笑顔や肯定的な評価 ・質問を受けて，自分の理解が深まったこと
学んだこと	・話し合いのプロセスの多様性を学んだ ・説明することの難しさと質問を受けて学びが深まること ・演習の開発はおもしろい
次にワークショップでしたいこと	・「対人関係のスキル」では，「困った人」への対応を考えてみたい ・１つのスキル（構造化，合意形成）に焦点化したワークショップの企画・実施 ・大学生の参加を増やし，現職の方を交えて実施したい

ワークショップの内容については良い評価が得られたが，進行の時間配分の検討が必要であったと考えられた。

(3) 第３回ワークショップ（合意形成のスキル）

1）実施日

平成24年10月14日（日）

2）目的

合意形成のスキルを理解し，日常の問題解決場面で活用する。

3）内容

演習１は「知的障害者のグループホームを始めよう！？」（自作課題），演習２は「泥遊びをさせたい・させたくない！誰か解決して！」（自作課題）を行った。また，演習１と演習２の間に「合意形成のスキル」のうち，意見対立の解消方法であるコンフリクトマネジメントを中心とした説明を行った。

4）ワークショップ参加者の感想

アンケートでは演習１で16名（88.9 %），演習２で16名（88.9%），全体を通しては16名（88.9%）が「役に立った」と回答があった（Fig. 1）。参加者の自由記述回答を示す（Table 7）。

３．授業履修者等の学び

(1) 平成23年度ワークショップ実行委員の学び

竹林地ら（2012）と重複するが，ワークショップのファシリテーター４名と３つの観点から振り返りを行い，意見を集約した（Table 8）。

(2) 平成24年度のワークショップ（全３回）を通した授業履修者の学び

全３回のワークショップを終え，授業履修者に学び・気づき等を付箋紙に記入してもらい，KJ 法的方法を用いて分類した。学びとして「ファシリテーションのスキルについての学び」「ワークショップ企画・運営についての学び」の２つに集約し，教員の自由記述回答とともに整理した（Table 9）。

Ⅳ．考　察

授業履修者の振り返りやワークショップに参加した現職教員の自由記述回答から，竹林地と山本が次の３点を検討・整理した。

１．ファシリテーションのスキルの実践的な知識と技能の深まり

「（ファシリテーター役をした気づきとして，）多くの意見の中から共通点や議論の中心を考えながら進めていくことが難しかった。仕切り役が過剰に仕切ると解決が遅れることが分かり驚いた。」「ワークショップ

Table 9　平成24年度ワークショップについての授業履修者と参加者の自由記述回答

ファシリテーションのスキルについての学び	・プロセスデザインではグループの方向性をきちんと決めておくことがズレを減らせる。 ・構造化により論点が明確になることで議論が活性化される。 ・合意形成のためには，時により高い視点で見ることが大切である。 ・話し合いの方法を学ぶことは大切。自分の話し方を指摘してもらえるのがうれしかった。 ・学校現場にこそ必要な力であり，気づくことで日々の取組が変わった。 ・（ファシリテーター役をした気づきとして，）多くの意見の中から共通点や議論の中心を考えながら進めていくことが難しかった。仕切り役が過剰に仕切ると解決が遅れることが分かり驚いた。 ・ワークショップの回を重ねるごとに話し合いの技量が高まっていると思った。 ・スキルを勉強したが演習に上手く活かせなかった。
ワークショップ企画の実践についての学び	【日程】 ・３回シリーズはよかった。 ・教員は（３回）通しての参加は難しい。しかし１回でもOKは参加しやすい。 【演習内容・方法】 ・一人で考えるよりチームで考える方が面白くなった。 ・目的・目標に向かって全員で行うことに意義があると思った。 ・チームで企画することで，自分たちの４つのスキルが高まった。 ・学校場面に即した演習内容を実施したい。 ・対応の難しい人がいた場合の演習を行いたい。 【参加者の構成】 ・（教員と学生が一緒にワークショップへ参加することは）立場や年齢が異なり，様々な意見や学び合いがある（教員）。 ・こり固まった自らに気づかされる貴重な機会。ファシリテーションについてだけでなく，教員としての自分を振り返るきっかけとなる。（教員） ・今日，学校現場で見落とされがちなことを，確認することができた。大学生の方のフレッシュな考えを聞いたり，積極的に学ぼうとしている姿勢に感心したりした。（教員） ・学生だけで活動すると，どうしても意見や経験が偏りがちなので，現職の先生とお話しできる貴重な機会（だった）。もっと現場のお話を聞ける場面があったらいい。（学生） ・経験豊富な先生と活動するのはすごく楽しかった。（自分が）話し合いに十分に参加できたかは怪しいが，良い勉強になった。（学生） ・（全３回共通して）教員の参加者が増えてほしい。様々な立場の人（保幼小中高，事業所等）が集まればよい。（学生）

の回を重ねるごとに話し合いの技量が高まっていると思った。」という感想から，授業履修者は，ワークショップを通じて，ファシリテーションのスキルの有効性や重要性を実感したと考えられる。また，知っていること（知識）とできること（技能）の違いを感じる者がいる一方，ワークショップに連続して参加することで，技能の高まりを感じたと考えられる。

また，教員は，ワークショップのグループ内の人間関係の深まりからも，ファシリテーションのスキルが，職場での活動に活かすことができそうだとの認識をもったと考えられる。

ワークショップとは，主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて創造と学習を生み出す場（堀，加藤，2008）といわれるが，ワークショップを企画・運営すること自体が，ファシリテーションのスキルを実際に使い，スキルの向上を実感することにつながっていると考えられる。従って，基礎的な知識・技能を学んだ後に，ワークショップを企画・運営するという授業のデザインは，授業履修者がファシリテーションのスキルの実践的な知識と技能を深めることに有効だったと

Table 10　平成23年度ワークショップと平成24年度ワークショップの概括

	日 程	学ぶスキル	企画・運営	演習課題の作成
平成23年度	一日・１回	４つのスキル（演習課題４）	実行委員４名	３課題
平成24年度	半日・３回	３つのスキル（１回１スキル・演習課題２ずつ）	グループ２～５名	５課題

考えられる。

２．ワークショップの実践的な知識と技能の深まり

平成23年度の試行では，４人の実行委員が企画・運営して，一日のワークショップで４つのスキルを学ぶ設定とした。また，平成24年度の授業では，１つのスキルを１グループが企画・運営して，半日のワークショップ４回で４つのスキルを学ぶ設定とした。平成23年度のワークショップと平成24年度のワークショップを概括する（Table 10）。

堀・加藤（2008）は，ワークショップが成功するとは，参加者の主体性と相互作用を育むことであるとし，ワークショップの特徴を５つ述べている。メンバーの主体的な「参加」，メンバーの共通の「体験」，対話による「協働」，一人では思いつかないような「創造」，参加者の相互作用による「学習」である。

「一人で考えるよりチームで考える方が面白くなった。」「目的・目標に向かって全員で行うことに意義があると思った。」「チームで企画することで，自分たちの４つのスキルが高まった。」という授業履修者の意見があった。また，「学校場面に即した演習内容を実施したい。」「対応の難しい人がいた場合の演習を行いたい。」という意見もあり，より現実的な場面を想定した演習課題の開発が必要であるとの気づきがあった。

授業履修者は，アイスブレイクを含めたワークショップの企画・運営，特に演習課題の開発・実施を通じて，ファシリテーションのスキルの学びを深めると同時に，ワークショップの５つの特徴を学んだと考えられる。

３．年齢・経験の異なる者によるシナジー効果

この授業では，授業履修者は２つの立場を経験した。１つは「学習者として授業とワークショップに参加する立場」であり，もう１つは「ワークショップの企画者としてワークショップを運営する立場」である。大学生からは，「学生だけで活動すると，どうしても意見や経験が偏りがちなので，現職の先生とお話しできる貴重な機会（だった）。もっと現場のお話を聞ける場面があったらいい。」「経験豊富な先生と活動するのはすごく楽しかった。（自分が）話し合いに十分に参加できたかは怪しいが，良い勉強になった。」「教員の参加者が増えてほしい。様々な立場の人（保幼小中高，事業所等）が集まればよい。」という意見があり，教員と対話すること，対話がある場を創り出すことに意義を見出していると考えられる。

一方，教員からは，「（教員と学生が一緒にワークショップへ参加することは）立場や年齢が異なり様々な意見や学び合いがある」「こり固まった自らに気づかされる貴重な機会。ファシリテーションについてだけでなく，教員としての自分を振り返るきっかけとなる。」「大学生の方のフレッシュな考えを聞いたり，積極的に学ぼうとしている姿勢に感心したりした。」という意見があった。

平成23年度の試行でも，「これまで教員と話す機会がなく，勉強になった。学生だけでは出てこない視点や意見が出て勉強になった。同じビジョンでよい雰囲気で話すことの大切さを学んだ。」（大学生），「教員のみより，大学生が参加することで，意見に広がりがあった。新鮮でこちらのモチベーションも上がった。」（教員）という同様な意見があった。

年齢・経験の異なる者がワークショップで「参加」「体験」「協働」「創造」「学習」する効果として，大学生も教員も「学生だけでは出てこない視点や意見」「意見の広がり」「モチベーションの高まり」等のシナジー効果を実感していると思われる。

今後は，教員の参加しやすい日程の設定やワークショップの周知方法等を工夫したい。

文　献

堀　公俊（2003）問題解決ファシリテーター．東洋経済新報社.

堀　公俊（2004）ファシリテーション入門．日本経済新聞社.

堀　公俊（2004）求められる技能－ファシリテーションスキル．発達の遅れと教育，566，21-24.

堀　公俊・加藤　彰(2008)ワークショップデザイン．日本経済新聞出版社，10-15.
文部科学省（2004）小・中学校におけるLD（学習障害），ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）.
佐藤節子（2012）学校における効果的なケース会議の在り方について：「ホワイトボード教育相談」の試み．山形大学大学院教育実践研究科年報，3，23-30.
鈴木博志（2011）働きがいのある学校づくりーファシリテーションによる協働性の促進ー．山形大学大学院教育実践研究科年報．2，194-201.
高間邦男（2005）学習する組織．光文社新書.
竹林地　毅・氏間和仁・川合紀宗・林田真志・落合俊郎・木舩憲幸・牟田口辰己・谷本忠明・若松昭彦・大鹿　綾（2012）特別支援教育担当教員の継続的な養成の在り方に関する研究ー教育委員会と連携・協力した研修実施による教員養成プログラムの開発ー．広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス共同研究プロジェクト報告書，10，57-72.
中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）.

（2013.1.18受理）